

「意味ある他者」の存在と大学生の未来展望との関連

比嘉麻美子* 高良美樹** 岡本祐子*

The relation between existence of Significant Others and future time perspective of university students

Mamiko HIGA, Miki TAKARA, Yuko OKAMOTO

We investigated the relation between existence of Significant Others and future time perspective in 179 university students. The results of this study were as follows. (1) There were positive correlations between the number of encounters with others and positive future perspective. It influences future perspective not to meet various "Significant Others" but to meet them in many sides. (2) Student of the high group of the future perspective wrote many future matters, and described contents were various. In addition, students of the high group of the future perspective regarded future positively and they were placed themselves in the relation with others.

Key words: Significant Others, future time perspective

問題と目的

Erikson (1950)によると、青年期の最も重要な心理社会的発達課題は、青年がいかにしてアイデンティティを確立していくかという点にあり、アイデンティティ形成の一側面として時間的展望 (Time Perspective)の確立があげられる (都築,1993)。時間的展望とは、「ある一定の時点における個人の心理学的過去及び未来についての見解の総体」と定義されており、広義には、個人の現在の事態や行動を過去や未来の事象と関係付けたり、意味付けたりする意識的な働きで、特に人生に関わるような長期的な時間的広がりのある場合をいう (Lewin,1951)。これまでの時間的展望についての先行研究では、時間的展望と適応変数や個人変数との関連性について検討がなされてきた。その領域は極めて幅広いが、その中でも未来展望に関する研究が多くされている。南・光富(1990)は、未来展望と精神的健康との関連を明らかにするために、精神的健康の指標として有能感を取り上げ、有能感の高い中学生は低い者よりも未来を明るいとしていることを見出した。そして、未来に対する感情的態度とは、精神的健康や健全なパーソナリティと関係する未来展望の一次元であるとした。Lewin(1951)は、「個人の士気や幸福は現在の快・不快よりも未来の期待に依存するところが一層多い」と述べており、先述の南・光富(1990)の研究と同様に、未来展望が健全なパーソナリティや精神的健康を特徴付けるひとつの重要な概念であることを指摘した。

* 広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

** 琉球大学 (University of the Ryukyus)

また、Lewin (1951) は、青年期には時間的展望が拡大し、現実的未来が開けてくることを特徴として挙げた。これまでの漠然とした未来観から、青年期には自立が重要な課題となり、未来が重要な問題として迫ってくる。すぐ先の近未来に加えて、遠い未来のことも考えなければならないし、憧れや夢としての未来展望のみではなく、現実的に自分がそれを実現可能である目標も設定しなければならない。つまり、青年期の未来展望は著しく発達し、他の時期とは大きく異なり、重要なものとなる。これまで、青年期の未来展望について、その広がりには焦点を当てた検討がなされてきた。しかし、年齢と共に未来展望が広がると結論づけた研究と、逆に年齢と共に未来展望の広がりには狭まると結論づけた研究とがあり、一致した知見は得られてはいない(白井, 1997)。このような差異が見られる要因として、青年の未来に対する感情が異なっていることが考えられる。つまり、未来に対して希望を抱いている青年にとって未来は望ましいものであり、展望できる未来の幅も広がるのではないだろうか。逆に、未来に対して希望を抱くことが出来ない青年は、未来に起こるであろう事柄を思い浮かべることそのものが不安を抱くこととなり、展望が狭まるのではないだろうか。つまり、青年の未来展望にとって重要なことは、青年がいかにしてポジティブな未来展望を築くかということであると考えられる。そして、今日増加が指摘されている「おとなになりたくない」青年は、未来に対してポジティブな未来展望を確立することができないのではないだろうか。

では、青年が「未来展望」を形成する要因は何であろうか。青年の未来展望を形成する要因の一つとして、「他者との関係」があげられる。Erikson はアイデンティティが他者との関係の中で形成されることを重視していたが、アイデンティティの概念を実証しようとしたこれまでの研究では、西洋的な男性優位の個人主義の中で、自律性や他者からの分離を発達の最優先課題としたものであった(杉村,1998)。そこで近年、「個」の側面のみではなく、「関係性」の側面をも含めてアイデンティティを捉えることの有用性が指摘されている。アイデンティティの一側面である時間的展望についても、白井(2004)は、「時間的展望は個人が人生経験のなかで生み出すが、それは対人的な文脈の中で生み出される」ことを指摘しており、「関係性」の視点を含むことの重要性が示唆される。同様に、奥田(2002)によって、「従来の時間的展望研究は個人内での展望を問題にするものであり、時間的展望における他者の役割を検討することが必要とされる」ことが指摘されている。このように、時間的展望研究において他者との関係性を視野に入れた研究の必要性が主張されていながら、この点に着目したものは多くは見受けられない。日常、私たちは様々な人から影響を受けて暮らしており、その中で、自分にとって重要な他者との関わりが未来展望に影響を与えることもあり得るであろう。例えば、人生の先輩である誰かを理想としたり、悩みを共有したりすることによって、未来へと向かうことができることもあるのではないだろうか。安達・菊池・木村(1987)は、このような「意味ある他者(Significant Others)」を「個人の生活の中でその存在自体が、あるいはその言葉がある重要な意味を持ち、個人の生活に影響を及ぼす他者」と定義した。また、菊池・安達・木村(1987)は、青年を取り巻く他者がどのような意味において青年の中に位置しているのかを明らかにすることによって、青年における「意味ある他者」を考えることを目的とし、青年が生活の中で何らかの意味で他者を意識したり、思い浮かべたりする場面を出来るだけ多くの側面から考え、「意味ある他者」項目を作成した。松田・若井・小嶋(1994,1995)は、これまでにどのような重

要な他者と、どのように関わりをもってきたのかという、発達における重要な他者との関わりを日米大学生、高校生において比較研究を行った。しかし、これらの「意味ある他者」研究は、意味ある他者の持つ意味と、青年にとっての意味ある他者が誰であるのかということを中心に検討しており、意味ある他者の存在の関連要因についての検討は行っていない。

以上のことより、自分の未来を模索する青年がどのようにして未来展望を形成していくかということは、希望をもって未来へと向かうために非常に重要なこととなるであろう。また、青年の未来展望とは他者との関係の中で構築されていくものであると考えられる。そこで、本研究では、「意味ある他者」の存在が大学生の「未来展望」とどのように関連するのかを明らかにすることを目的とする。ここで、「意味ある他者が多い」と言った時、菊池・安達・木村（1987）が見出したような様々な側面において意味ある他者との出会いがあるということと、ただ純粹に出会った意味ある他者の人数が多い、すなわち意味ある他者が多様であるということの2つが考えられる。本研究では、菊池ら（1987）による意味ある他者項目の各項目で表される、意味ある他者の様々な側面の各側面における意味ある他者との出会いを「他者との出会い」の数とする。また、多様な意味ある他者の人数を「選択他者数」とする。大学生の未来展望と関連するのは、多くの側面において意味ある他者との出会いがあることなのか、それとも出会う意味ある他者が多様であるということなのかを明らかにすることを本研究の第1の目的とする。

個人が将来に対してどのような見通しを持っているのかを測定する方法として、これまでの研究で主に用いられてきたのは、(1) あらかじめ調査者が準備した項目から自分にあてはまるものを選択する方法（外在的視点による方法）と、(2) 被調査者自らが抱く将来の見通しを自由に記述してもらう方法（内在的視点による方法）である（尾崎,2002）。外在的視点による方法は、調査者間の比較が容易であるという長所を持つ一方で、とらえられる側面があらかじめ設定された範囲内に限定されるという短所を持つ。内在的視点による方法は、個人が思い描く将来の見通しを自由に表現できるという長所がある一方で、実現可能性が低い展望を記述する可能性があるという短所がある。本研究では、外在的視点による方法として、過去・現在・未来に対する感情評価であり、未来または過去の事象に対する肯定的あるいは否定的評価を測定する、白井(1994)による時間的展望体験尺度 (Experiential Time Perspective) を使用する。しかし、「未来展望」と一言で言っても、その内容は個人によって異なる。また、展望がある「未来」もその個人にとって未来のいつを指しているのかという、思い描かれた未来の時期は人それぞれである。そこで、内在的視点による方法として、将来、起こりうると予想される出来事を想起させ、自由記述させる「出来事検査 (白井,1997)」を使用する。これによって、第1の目的だけでは知ることができない、大学生の未来展望に関する具体的なイメージを測定し、大学生が思い描く未来とは、具体的に未来のいつを指しているのかを明らかにすることを第2の目的とする。

方法

調査対象者: 国立大学生 179名 (男性 71名, 女性 108名) 平均年齢 20.53歳, $SD=1.55$)

調査時期: 2004年10月～11月

調査内容および測定尺度

(1) 意味ある他者

① 他者との出会い

菊池・安達・木村(1987)が作成した「意味ある他者」項目をもとに作成した。菊池らの「意味ある他者」項目は、青年にとって各側面における意味ある他者が誰であるかを検討している。本研究では、菊池らの見出した意味ある他者の様々な側面に、該当する人がいるか否かを問う形式とした。また、調査対象者にとって理解しづらい表現があると思われる項目に関しては、類似した言葉に言い換えを行った。質問には「はい」または「いいえ」で答え、「はい」と回答した場合にはそれが誰であるのかを、父、母、兄弟姉妹、祖父母、友達、恋人、教師、先輩、タレント、9つの選択肢の中から一人だけ選択するよう求めた。また、上記の選択肢に当てはまらない場合には、「その他」を選択した上で、それが具体的に誰であるのかを記入するよう求めた。全22項目のうち、何項目に「はい」と答えたかを数え、「他者との出会い」の数とした。

例) 自分の生き方を変えるきっかけになった人がある・・・・はい・いいえ

[父・母・兄弟姉妹・祖父母・友達・恋人・教師・先輩・タレント・その他()]

② 選択他者数

①と同一の質問紙を用いた。意味ある他者項目の5項目に「はい」と答え、①の「他者との出会い」の数は5点で等しいとしても、5項目全てに同一人物を選択した回答者や、5項目全てに異なる人物を選択した回答者など、誰を何回選択したかが異なることが考えられる。そこで、①において、「はい」と回答された各項目について、誰が選択されているのかを特定し、選択された他者の中で重複しない対象者の数を数えて「選択他者数」とした。つまり、各対象に関しては何回選択されていようとも1回だけを数えることとした。この手続きにより、「選択他者数」は最小で1(ただし、「意味ある他者」項目の全てに「いいえ」と答え、「他者との出会い」の数が0であれば「選択他者数」も0となる)、最高で「他者との出会い」の数と一致することとなる。よって、例えば「はい」と答えた5項目全てにおいて意味ある他者を「父」と選択しておれば、選択他者数は1人となり、5項目に「父」「母」「教師」「先輩」「兄弟」等、全てに異なる人物を選択しておれば、選択他者数は5人となる。

(2) 未来展望

① 未来展望得点

白井(1994)が作成した時間的展望体験尺度は、「現在の充実感」「過去受容」「目標指向性」「希望」の4因子が含まれており、計18項目で構成されている。白井(1994)による時間的展望体験尺度作成の試みの研究結果より、未来は「希望」「目標指向性」の2つの側面でもとらえられることが示唆された。よって、本研究では、「希望」に含まれる4項目、「目標指向性」に含まれる5項目、全9項目を使用する。「とてもよくあてはまる(5点)」～「全くあてはまらない(1点)」の5件法

を用いることから、得点範囲は9点～45点となる。点数が高いほど目標指向的であり、未来に希望を抱いていることを示す。本研究では、時間的展望体験尺度の9項目を用いて、「未来展望」得点とする。

②出来事検査

①で部分的に用いた時間的展望体験尺度は、たとえば、将来に目標があるといっても、それが遠い未来なのか、近い未来なのかは問題としていない(白井,1994)。そこで、大学生が思い描く未来が具体的に「いつ」を指すのかを明らかにするために、出来事検査(白井,1997)を併せて行った。

20代～80代の各年代において、「あなたが将来、実行すると思われることを書いて下さい。もし、その年代ですと思われることが思い浮かばなければ、「なし」と書いて下さい」と教示した。当該の年代における未来的事象の記述数が多いほど、未来展望があることを示す。

(3) デモグラフィック項目

手続き:調査は、大学の講義中に集団で実施した。調査対象者に質問紙を配布し、回答方法についての説明を行った後、一斉法により実施し、その場で回収した。所要時間は、説明を含め約20分程度であった。

結果

1.「意味ある他者」と「未来展望」との関連

各側面における他者との出会いの有無を「他者との出会い」、多様な他者の数を「他者選択数」とし、未来展望との偏相関を検討した(Table 1)。その結果、「他者との出会い」と「選択他者数」($r=.478, p<.001$)、及び「他者との出会い」と「未来展望」には中程度の有意な正の偏相関があった($r=.486, p<.001$)。「選択他者数」と「未来展望」との間にはマージナルな負の偏相関があった($r=-.128, .05<p<.10$)が、偏相関係数は低かった。

よって、「意味ある他者」について、「他者との出会い」の数が多いことが「選択他者数」が多いことよりも「未来展望」とより関連していることが示された。

Table 1. 「意味ある他者」と「未来展望」の偏相関

	他者との出会い	他者選択数
未来展望	.486***	-.128+
他者との出会い		.478***

*** $P<.001$, + $.05<p<.10$

2. 「未来展望」得点と「出来事検査」による記述数との関連

人数がおおよそ同数になるように、未来展望得点によって低群、中群、高群に調査対象者を3分割

した。各群における「出来事検査」による未来事象の平均記述数および標準偏差を Figure 1 に示した。未来展望得点による 3 群を独立変数、「出来事検査」による記述数を従属変数として、1 要因 3 水準の分散分析を行った。その結果、主効果が有意であった ($F(2,176)=13.62, p<.01$)。LSD 法による多重比較を行ったところ、未来展望低群(13~25 点, $N=54$) < 未来展望中群(26~31 点, $N=66$)、未来展望低群 < 未来展望高群(32~45 点, $N=59$) となった。未来展望中群と高群との間には有意差はなかった。よって、未来展望得点が高い、すなわち未来をポジティブに捉え目標指向的である者は未来展望得点が高い者に比べて、実際に自分が未来に実行すると思われる具体的事象を多く思い描くことが明らかとなった。

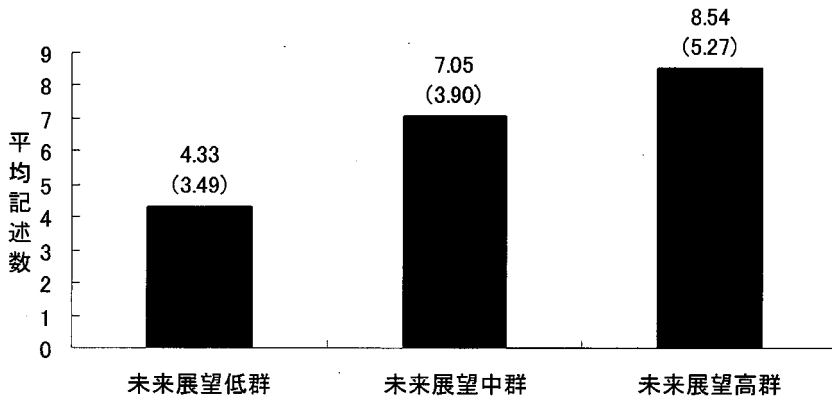


Figure 1. 未来展望の 3 群による出来事検査の記述数 (SD)

次に、未来展望得点のみでは知ることが出来ない、大学生が思い描く未来が具体的にいつなのかを示すために、「出来事検査」における 20~80 代の各年代について、20~30 代を「成人初期」、40~50 代を「中年期」、60 代以降を「老年期」とした。未来展望得点による 3 群において出来事検査の各年代の平均記述数 (SD) を Table 2 に示した。「未来展望」得点による 3 分割と「出来事検査」の 3 分割を独立変数とし、「出来事検査」の 3 分割による各時期における出来事検査の記述数を従属変数とする 2 要因混合計画の分散分析の結果、未来展望の主効果と出来事検査の主効果が有意であった (未来展望: $F(2,176)=14.39, p<.01$; 出来事検査: $F(2,352)=163.35, p<.01$)。さらに、未来展望 × 出来事検査の交互作用がマージナルな有意差があった ($F(4,352)=2.36, .05 < p < .10$)。LSD 法による多重比較の結果、「成人初期」、「中年期」、「老年期」のいずれの時期においても、未来展望「中群」、「高群」は未来展望「低群」よりも高い値となった ($p < .05$)。未来展望「中群」と「高群」の間には有意差はなかった。また、未来展望「低群」と「高群」においては、「成人初期」の記述数が「中年期」「老年期」よりも多く ($p < .05$)、「中年期」と「老年期」との間に記述数の有意差はなかった。未来展望「中群」では、「成人初期」の記述数が「中年期」「老年期」よりも多く ($p < .05$)、「老年期」の記述数が「中年期」よりも多かった ($p < .05$)。

Table 2. 未来展望得点の各群における出来事検査の平均値 (SD)

	成人初期	中年期	老年期	計
「未来展望」低群 (N=54)	2.39 (1.52)	0.89 (1.31)	1.06 (1.42)	4.33 (3.49)
「未来展望」中群 (N=66)	3.67 (1.73)	1.48 (1.38)	1.89 (1.61)	7.05 (3.90)
「未来展望」高群 (N=59)	4.25 (2.25)	1.95 (1.66)	2.34 (2.08)	8.54 (5.27)
計	3.47 (2.01)	1.46 (1.52)	1.79 (1.80)	

3. 「未来展望」得点と未来事象の記述

南・光富(1990)によると、未来展望における領域に対する関心(その個人が展望のどの領域に強く志向するかを示す概念)や人生設計は、未来展望の構造の中核をなすと考えられるものである。大学生が思い描く未来展望がどのような内容であるのかを明らかにするために、記述された事象の内容について、南・光富(1990)の研究におけるカテゴリーと尾崎(2002)の研究におけるカテゴリーを参考に、「仕事」「結婚」「家庭」「知識」「趣味」「生活様式」の6つのカテゴリーに分類した。「成人初期」における具体的な未来事象の記述数を Figure 2 に表す。Figure 2 より、成人初期における未来事象の記述数は、「仕事」「結婚」「趣味」「生活様式」において中群>高群>低群の順で記述数が多かった。「家庭」「知識」では高群>中群>低群の順で記述が多く、その差は顕著であった。

同様に、Figure 3 は「中年期」における未来事象の記述数を表す。Figure 3 より、「仕事」「家庭」において高群>中群>低群の順で記述数が多く、その差は特に「家庭」において顕著であった。「生活様式」では中群の記述が最も多く、具体的には「家を購入する」ことなどがあげられた。「結婚」については低群と中群、「知識」については中群と高群でのみ記述があった。

Figure 4 より、老年期における未来事象の記述数は、「仕事」「家庭」「趣味」「生活様式」において高群>中群>低群の順で記述数が多く、「知識」では中群と高群にのみ記述があった。「仕事」に関する記述は「退職」などがあげられ、「家庭」は「孫が生まれる」、「趣味」では「旅行をする」、「生活様式」では「老人ホームに入る」ことなどがあげられた。また、高群では、「その他」の記述数が多く、具体的には「農業をする」「健康のためにスポーツをする」ことなどがあげられた。

成人初期

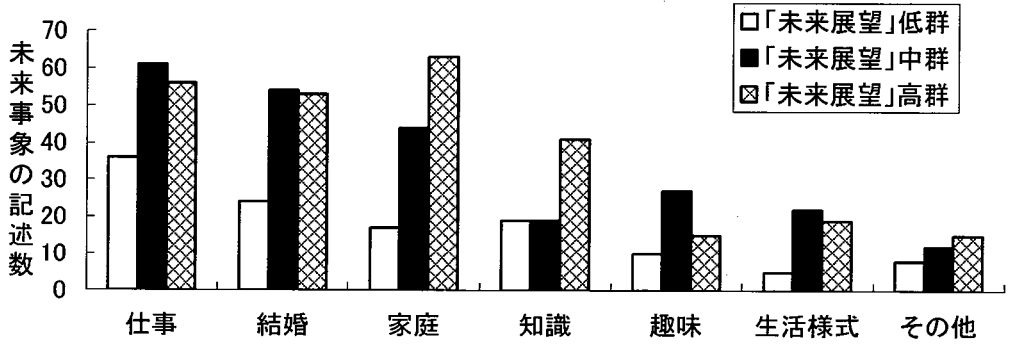


Figure 2. 「成人初期」における未来事象の記述数

中年期

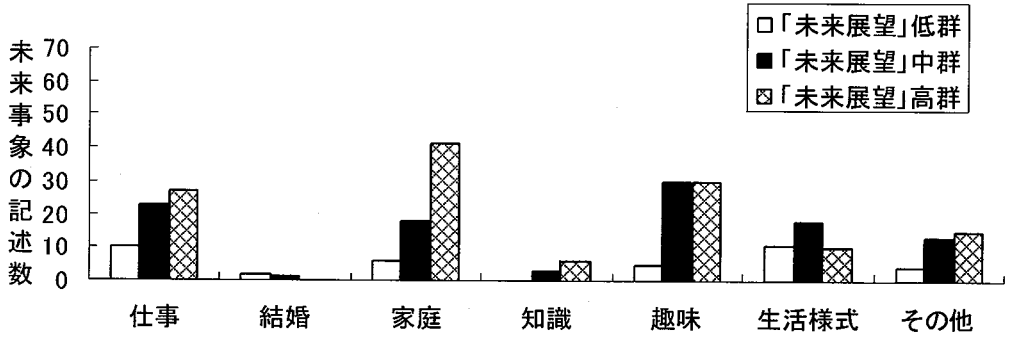


Figure 3. 「中年期」における未来事象の記述数

老年期

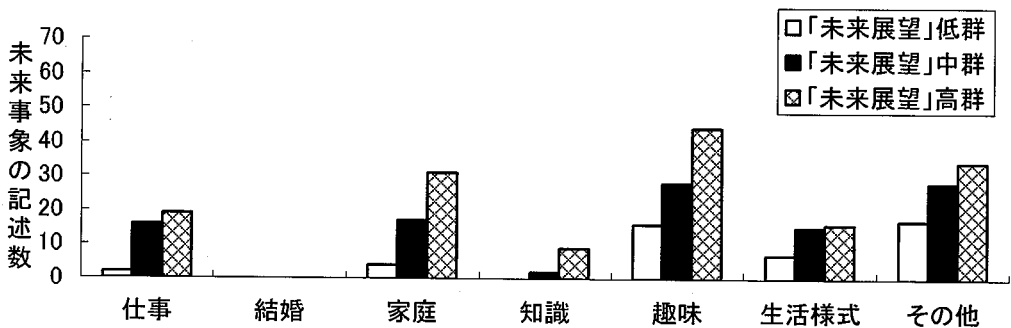


Figure 4. 「老年期」における未来事象の記述数

考察

1. 「意味ある他者」と「未来展望」との関連

本研究の目的は、「意味ある他者」の存在と「未来展望」との関連を探ることであった。その結果、「意味ある他者」項目に多く「はい」と答えた者、すなわち様々な側面に「他者との出会い」がある者ほど、未来展望得点が高く、「選択他者数」も多いことが明らかとなった (Table 1)。このことから、「意味ある他者」は純粋にその人数が多いことではなく、様々な側面に他者との出会いがあることの方が、未来展望とより関連していることが示された。つまり、未来展望に影響を与えるのは、多様な「他者」と多く出会うことではなく、「意味ある他者」項目の各項目で現されるような、尊敬する、頼りにするなどといった、多くの側面において意味ある他者との出会いがあることである。嶋野・菅原・大浪(2003)によると、将来に希望や目標を持ち、将来への見通しを立てられる者は、さまざまな状況に対応でき、人とのコミュニケーションがうまくとれ、積極的に人と関わっていることが示唆された。よって、未来展望がある者ほど、積極的に人と関わり、その中で、自分にとって「意味ある他者」と出会うと考えられる。そして、それはただ、多くの人と関わるのみではなく、様々な側面において他者との出会いがあることが重要なのであろう。また、他者との出会いの中で「未来展望」が形成されることもあるだろう。様々な側面において意味ある他者との出会いがある者は、例えば未来に対して不安を抱くことがあったとしても、出会った他者をモデルにしたり、実際に関わり合うことの中でそれを払拭し、未来展望を築くことができることもあると考えられる。「他者選択数」と「未来展望」との偏相関係数の値が低かったことから、意味ある他者の人数が多いということのみでは、未来に対する目標や希望を抱くことに有効であるとは言えず、たとえ意味ある他者の数がそれほど多数ではなかったとしても、出会った意味ある他者が自分にとってさまざまな側面において有益であることが未来展望を築く際には重要なこととなるのであろう。

2. 「未来展望」得点と「出来事検査」の記述数

本研究では「未来展望」得点と「出来事検査」という2つの尺度を併せて行うことによって、大学生の未来展望を測定した。その結果、まず未来展望高群と中群はそれぞれ、未来展望低群よりも出来事検査による記述数が多かった (Figure 1)。「未来展望」得点を測定した白井による時間的展望体験尺度の項目は未来に対する感情や目標の有無を問っており、「出来事検査」では各年代において実際に自分が実行すると思われる事象を記述するよう求めている。よって、未来展望得点が高い群にある回答者、つまり目標指向的であり未来をポジティブにとらえている回答者はそうではない回答者に比べて、出来事検査による記述数が多く、実際に実行すると思われる事象が多いことが明らかとなった。未来展望がある者はない者に比べて、自分の未来を想像することが容易であると考えられる。

また、「未来展望」得点のみでは知ることが出来ない、「意味ある他者」と特に関連する、大学生が思い描く未来が具体的にいつなのかを明らかにするために、未来展望得点の3分割 (低群・中群・高群) と出来事検査の3分割 (成人初期・中年期・老年期) を独立変数とし、出来事検査による記述数を従属変数として、2要因の分散分析を行った。その結果、「成人初期」、「中年期」、「老年期」のいずれの時期においても、未来展望「中群」、「高群」は未来展望「低群」よりも高い値となった。

先述したように、未来展望が高い群は低い群よりも出来事検査による未来事象の記述数が多く、目標を持ち未来をポジティブに捉えている者ほど未来展望があるということがここでも示されたと言えるだろう。また、未来展望「低群」と「高群」においては、「成人初期」の記述数が「中年期」「老年期」よりも多く、未来展望「中群」では、「成人初期」の記述数が「中年期」「老年期」よりも多く、「老年期」の記述数が「中年期」よりも多かった。これは、大橋・篠崎(1992)による調査結果とほぼ一致したと言えるだろう。大橋らは、学生 189 名を調査対象とし、自由記述を中心とした質問紙法を用いた調査によって、大学生が人生における将来の転換点をどのように捉えているかを調査した。その結果、「就職」「結婚」「子どもの誕生」「定年退職」が転換点として挙げられる頻度が高かった。また、この主要な転換点は、中年期を境にそれ以前の「得る」転換点（「就職」「結婚」「子どもの誕生」）とそれ以後の「失う」転換点（「定年退職」）に分けられる。「得る」転換点の前は準備を必要とし、かつ自由な時であり、転換点の後には、得た出来事により生活空間が占められるようになる。一方、「失う」転換点の前は、失う出来事（「仕事」で一致している）により生活空間が占められているが、転換点の後には、自由な時であり、新たな準備の時でもあることが示された。本研究の結果が大橋ら(1992)の調査結果とほぼ一致した理由も、大橋らが述べる、上記の事柄によって説明されるだろう。つまり、「就職」「結婚」「子どもの誕生」などの「得る」転換点が多く起こりうると考えられる「成人初期」は大学生にとって具体的な未来事象が思い描き易いために、記述数も最も多くなると考えられる。そして次に記述数が多い「老年期」に関しては、本研究における「老年期」は 60 代以降であり、多くの者が 60 歳で定年退職を迎えることから、本研究における「老年期」とは定年退職後の生活であるということができるとであろう。大橋ら(1992)が述べるように、定年退職は「失う」転換点であり、それ以後は新たな準備の時でもあるため、定年退職後の「老年期」には再び記述数が多くなったと考えられる。定年を機に自由な時間も増え、これまでやりたくてもできなかったことがらや趣味など、自分の意志によって時間を使うことができるということがこの時期の記述数が多くなった理由なのではないだろうか。また、「中年期」における記述数が最も少なかったのも、「得る」転換点の後には得た出来事により生活空間が占められるようになるために、具体的事象を多く思い浮かべることができないと考えることができるだろう。つまり、「中年期」には、「就職」「結婚」「子どもの誕生」などの「得る」転換点によって得た、仕事や家庭生活、育児など、日々の日常に追われていると考えられ、大きな転換点はあまり考えられないのかもしれない。そして、本来ならば各々の個人や家庭で異なっていると思われる日常も大きな転換点が無いために、具体的な事象として思い描くことができず、記述数が最も少なかったのではないかと考えられる。よって、大学生は現在の自分と深く関わる近未来や、それとは逆に現在とは遠い未来に関しては具体的な事象を思い浮かべることができるが、その間にある中年期に関しては、漠然としており、具体的事象を思い浮かべることが容易ではないことが示された。

3. 「未来展望」得点と未来事象の記述

未来展望得点による未来展望高群・中群・低群の各群において、記述された未来事象を 6 つのカテゴリーに分類した (Figure 1, 2, 3)。いずれの群においても最も未来事象の記述数が多かった「成人初期」に関する具体的記述は、「仕事」「結婚」「家庭」が多かった。この結果は大橋ら(1992)の研

究と一致するものであり、やはり「得る」転換点が多く起こりうると考えられるために「成人初期」における記述が最も多くなったと考えられる。しかし、大橋らの研究で重要な転換点としてあげられた「定年退職」を表す、「老年期」における「仕事」に関しては、「老年期」におけるその他のカテゴリーと比べて記述数が少なかった。「老年期」では、「仕事」に関する記述よりも、「趣味」や「家庭」、「生活様式」の記述が多かった。また、「老年期」は本研究における6カテゴリーには分類されない「その他」の記述が多かった。この結果から、大橋らの研究のように、「定年退職」は思い描かれる具体的事象としてはそれほど記述されなかったが、「趣味」や「その他」の記述が多かったことなどから、定年退職後は各々にとって自分がやりたいことを行う、自由な時期であり、そのために具体的事象が個人によって異なると考えられる。よって、「定年退職」を転換点として、その後は自由な時であり、新たな準備の時でもあるという大橋らの見解は、本研究においても同様のことが言えるであろう。

また、いずれの年代においても、未来展望高群は「知識」と「家庭」に関する記述が多かった。未来展望高群は、いずれの群においても記述数が多かった「仕事」に加えて、更なる知識を得て自らの技量を向上させたいという思いがあることが示唆された。

さらに、いずれの年代においても未来展望高群は「家庭」に関する記述が顕著に多く、自分以外の家族のことを多く思い描くという結果は、家族は最も身近な「意味ある他者」になりうる可能性が高いことから、未来展望高群の回答者は他者との関係の中に自分の未来を位置づけていると考えられるであろう。一方、未来展望低群や中群では、「趣味」「生活様式」に関する記述が多く、「家庭」に関する記述割合が高かった未来展望高群と比べると、他人との関係の中で未来を描くのではなく、自らの興味や生活に重点をおいていると考えることができると思われる。よって、未来展望の高群にある回答者は、他者との関係の中で自らの未来を描いていることが示唆された。つまり、多くの側面に「意味ある他者」の存在がある大学生は、自らの未来をポジティブに捉え、また思い描かれる未来も他者との関わりの中に自分を位置づけているといえる。

4. 本研究における課題

本研究には、以下のような課題がある。まず、本研究では「意味ある他者」項目の各項目に関して、「はい」と回答した場合には、それが誰であるのかを、父親、母親、兄弟姉妹、祖父母、友達、恋人、教師、先輩、タレント、その他、の9つの選択肢の中から1人だけ選択するように求めた。しかし、「父親」や「母親」は多くの者が一人しか存在しないのに対して、「友だち」や「教師」などは、多数存在するであろう。よって、意味ある他者項目の複数の項目に同じ人物を選択していたとしても、実質的には異なる人物を選択している可能性があることが考えられる。また、本研究では、大学1年生から4年生までを込みにして集計をした。しかし、大学に入学したばかりの1年生と、社会へ出ることがすぐ近くに迫っている4年生とでは、未来についての考えや展望が異なっている可能性がある。学年差を考慮した研究が必要であろう。加えて、本研究では、大学生の未来展望に限定して研究を行ったが、中学生や高校生に対しても同様の調査を行い、学校段階ごとに「意味ある他者」と未来展望との関連がどのように異なるのかを明らかにすれば、青年の未来展望を発達のみにみることもできるであろう。

引用文献

- 安達喜美子・菊池龍三郎・木村清一 (1987). 大学生の生活に影響を及ぼす他者の意味 — 「意味ある他者」研究への新しい手がかりを求めて — 茨城大学教育学部紀要 36, 173-187.
- Erikson (1950). Identity and the lifecycle *Psychological Issues*, 1, 1-117.
- 菊池龍三郎・安達喜美子・木村清一 (1987). 地域における青少年教育のシステム化に関する基礎的研究 マツダ財団研究報告書 1, 80-87.
- Lewin, K (1951). *Field theory and social science*. New York: Harper. (猪股佐登留 (訳) (1956). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 松田惺・若井邦夫・小嶋秀夫 (1994). 発達における重要な他者(メンター)との関わりの分析 (1) 日米大学生の比較研究 愛知教育大学研究報告 教育科学 43, 105-118
- 松田惺・若井邦夫・小嶋秀夫 (1995). 発達における重要な他者(メンター)との関わりの分析 (2) 日米高校生の比較研究 愛知教育大学研究報告 教育科学 44, 101-120.
- 南博文・光富隆 (1990). 青年期における未来展望と有能感の関係に関する研究 広島大学教育学部紀要 38, 241-248.
- 奥田雄一郎 (2002). 時間的展望研究における課題とその可能性 — 近年の実証的・理論的研究のレビューにもとづいて — 中央大学大学院研究年報 31, 333-346.
- 大橋靖史・篠崎信之 (1992). 青年におけるこれからの人生設計に関する研究 — 将来の転換点の分析を中心とした — 早稲田大学人間科学研究 5, 81-95.
- 尾崎仁美 (2002). 大学生の将来の見通しと適応との関連. 溝上慎一 (編) 大学生の自己と生き方 — 大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学 — ナカニシヤ出版 167-198.
- 嶋野重行・菅原正和・大浪瑠夏 (2003). 時間的展望(Temporal Perspective)が向社会的行動に与える影響 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要 2, 133-140.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究 65, 54-60.
- 白井利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 白井利明 (2004). 時間的展望とアイデンティティにおける家族成員間の関連 — 青年期後期の子どもとその親である中年期夫婦を対象にして — 大阪教育大学紀要 第IV部門 52-2, 241-251.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究 9, 45-55.
- 都築学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究 41, 40-48.